

泉谷 明 (いずみや・あきら)

1、プロフィール

詩人。中上哲夫、八木忠栄等と共に路上派詩人と呼ばれ、その旗手として活躍。後続の若い詩人たちに大きな影響を与えた。76年、晩翠賞受賞。

<生没>

1938(昭和13年)1月1日 ~ 2020(令和2)年4月26日

<代表作>

『ぼくら生存のひらひら』『濡れて路上いつまでもしぶき』

『日は降る雪をのぼってきた』『心配ですか』『ひとひとり』

<青森との関わり>

金木町出身。昭和40年、山田尚と共に詩誌「垂土」を発行。「垂土」は、小笠原茂介を始め、多くの優れた詩人を世に送り出した。

2、作家解説

弘前大学教育学部在学中より、作家を志し習作を試みる。小学校教員に採用され小泊村に赴任。この頃より詩作を始め、東奥日報紙の東奥詩壇等に投稿。川村欽吾氏に評価される。1963年、諏訪優氏が翻訳・紹介したアメリカのビート詩人、アレン・ギンズバーグの作品に強い衝撃を受け、以後深く傾倒。歩きながら、あるいは疾走しながら沸き起こる想念を、極端に長い一行とごく短い一行が交錯する表記の上に再現させるという独自のスタイルを確立した。

第二詩集『ぼくら生存のひらひら』(68年)に対し、当時、三木卓氏は「ここには戦後の詩を土壌にして、独自ののびやかな姿勢を示している詩人がいた」と評し、渡辺武信氏は、「老練さなど全く無縁な奔放なスタイルの中にぼくたちの状況のいらだたしさをかなりよく定着した点で注目をひく」と述べている。全国的にも注目される詩人となった泉谷明は、商業誌にもその活動の場を広げ、76年にはそのスタイルの金字塔ともいえる第四詩集『濡れて路上いつまでもしぶき』を刊行。この詩

集により、第 17 回晩翠賞を受賞、77 年には第 4 回青森県芸術文化奨励賞を受ける。

その後、泉谷明は詩人としての評価を不動のものとしていくが、教育者としては小学校校長まで勤め上げ、子供たちへの詩の指導においても定評があった。教え子の中には三上寛がいる。また、詩論家・泉谷栄は実弟。詩人・詩論家の山田尚と共に昭和 40 年創刊以降、詩誌「亜土」が本県の文学者に与えている影響は多大なものであり、山田尚と泉谷明がその詩精神において、高木恭造の後継者であることは自他共に認めるところである。

3、資料紹介

○『濡れて路上いつまでもしぶき』

図書

1976(昭和 51)年

220mm×150mm

中期を代表する詩集。1972 年～1976 年の間に中央の商業誌(「ユリイカ」「現代詩手帳」等)に発表された作品を中心に編まれている。特にこの頃の作品には、弘前市実在の地名がちりばめられており、それがもうひとつの魅力となっている。